

第二編

有 時

蓋時の章

古仏言

有時高々峯頂立

有時深深々海底行

有時三頭八臂

有時丈六八尺

有時拄杖拈子

有時露柱灯籠

有時張三李四

有時大地虚空

有 時

有時とは、第一篇の中で述べたように、蓋時のことである。仏が正法眼から観た自己の全体相、又は、森羅万象の一切を、私は蓋時と呼ぶ。我とは時なりの時である。

有時を、うじ、有る時、と、参学読了する諸氏がいる。道元は文字の修辞による表現のために、有時と表示したのであって、本意は、時、蓋時、のどちらかであったと考える。

例えば、有る時とは、存在論と時間論の立場から此の巻を参学することになる。時の蓋時をもって、究尽すれば当体蓋時である。

第一篇で説明したように、円頓・頓悟・時間論か空間論かは、道元禅を二分する教義上の重要な問題がそんざいする。蓋時から説けば、全時間の顕在全体相のほかに、固定した存在が無いことを意味する。起滅する流動運動体の一瞬が起時転円し、一瞬が滅時円転する弧円の全起・全滅が、蓋時であることを示している。

古仏言

古仏とは仏祖である。ここでは、次の文が薬山惟巖禅師の言葉の引用なので、古仏は薬山とする。薬山（七四四―一八二七）は、石頭希遷の法嗣である。弘道大師とも云う。古来より禅宗では、古仏と礼賛する。薬山がこのように語っている。ここはたんなる言

葉というより、有時卷全体を貫く観点を、道元は此の一句で表示していると理解すべである。

古仏とは覚者のこと。悟りの体験を成就した修行者である。道元風に云うと、身心脱落した解脱の境界人のことであり、最終の結論の章まで、仏の正法眼から、有時の卷を参究すべきなのである。古仏言くとは、解脱した当に観るところの観点から、理解すべきであると、道元は巻頭にこの言葉を配したのだ。

有時高々峯頂立、有時深々海底行、有時三頭八臂、有時丈六八尺、有時拄杖 扠子、有時露柱灯籠、有時張三李四、有時大地虚空

古仏言くの、次の文であるから、仏の悟りの観点をもって、自己と全宇宙を当に観るときである。八つの文のうち、前二句の「有時高々峯頂立」「有時深々海底行」と、後の「有時三頭八臂から有時大地虚空」の六句は蔵身円融の関係である。二つを凡夫の論理的な分離の世界へと説明上分けて述べる。前の二句は主観の自己全体のことであり、後の六句は客観の尽十方世界のことである。自己の身心全体と、自己と対面し立ち現われている尽宇宙世界との蔵身と脱落を、道元は問題の中心テーマとしているのだ。

では、主観の自己の顕在全体が、「有時高々峯頂立・有時深々海底行」とは、どのような境位と理解すべきなのか。この二句は葉山惟巖の言葉である。『景德伝燈録』、十四、二十八、からの出典で、「須向高高山頂立、須深深海底行」からの引用である。有時とは蓋時である。高々峯頂立とは、峨峨たる切り立った峯々のことであり、深々海底行とは深い海底を歩行する全体を表わす。

この文は、自己の全存在と実相との相関を、「峯」と「海」の、例えで述べている。峯とは、蓋時の自己の身心全体であり、海とは、尽実相・尽現・尽十方世界の自己のことである。一刹那時間に身心相(舟・雲)・運動(行・駛・移)・位置(不滅)・実相(月)が、蔵身した境地である。

刹那時のリズムの全起が峯であり、リズムの全滅が海である。脱落した境地のことだ。『妄尽還源觀』「妄尽き心澄んで万象斉く現ず、風止息して海水澄清」のことではない。自己の身心全体が深海の底地から尽宇宙の無涯辺まで、自己の全体相のことを深々海底行で現わしている。

波の天辺から深海底の底地までが波のリズム全体相であり、自己の全体相が高々頂立である。波のリズム全体が転円する、自己を差別とよび、海全体相の円転を平等と呼ぶのである。静止的な全体相ではなく、転円・円転する、刹那時起・刹那時滅の当体が峯であり海である。

曹洞宗では一方究尽であり、一方を証するとき一方はくらしのことである。波の中に海が隠れてしまった全体、ようするに、蓋時の自己の全一が、高々峯頂立であり、永遠の海の尽実相全体の自己が深々海底行である。

眼蔵第十三卷『海印三昧』に深深海底行をこのように説かれている。「諸仏諸祖とあるに、かならず海印三昧なり、この三昧の遊泳に、説時あり、証時あり、行時あり、海上行の功德その徹底行あり、これを深深海底行なりと海上行するなり」諸仏や諸祖は必ず海印三昧の行持である。海印三昧も非思量も身心脱落の解脱の境地も同じ境界であり、一心多名のことである。仏の悟りの境地の自在な様子を、遊泳、又は、遊戯三昧と呼ぶ。自在な生き方そのもの全体が、妙修であり、説法する時あり、証する時あり、行持する時があると謂う。

第十六行持卷「仏祖の大道、かならず無上の行持あり。道環して断絶せず、発心、修行、菩提、涅槃」しばらく間隙あらず、行持道環なり」である。海上行の功德とは、自在な仏行全体の境地のときには、全宇宙は自己の世界であり、非思量であり透徹している。そのことが海上を運歩すると云う。

『聴書』「有も尽十方界を以て有と任、時も以て尽十方界時と取」、「所詮此三昧の正当麼時には説くも証も行もあるなり、海を以て証とし、行とするゆへなり、ゆへに海上行功德其徹底行ありと云ふ也、徹底行とはとどこうる物なく、そこまでとをりたる心なり、徹底証とも云ふべし」

身心脱落した全体の蓋時の自己を高々峯頂立と説き、空間的な尽現の尽実相の自己全体を、深々海底行と呼ぶのである。有とは、尽十方界のことであるから、全宇宙の自己である。時とは、尽十方界時なのだから、全宇宙が蓋時のことである。どちらにしても、自己の身心当体が、空間的には、深深海底行、時間的には蓋時であり、高々峯頂立である。自己の即時を高々とよび即現を深々と説くのである。

前の二句は自己の存在全体が中心テーマであった。後の六句は自己の生命が依るところの、当に仏から観る客観世界（環境世界）の尽宇宙空間と、そこに存在する物々が主題である。 有時三頭八臂の三頭八臂の意味は不動明王のことである。仁王様の相貌を云う。有時丈六八尺の丈六八尺は、釈尊の身長が一丈六尺あったといわれている。釈尊の代名詞を、丈六八尺とよぶ。有時拄杖拈子の、拄杖拈子の拄杖とは僧侶が行脚の時に使用する、木の杖のことであり、拈子とは、禅僧が儀式に用いる、法具のことである。これらは仏家の日常身に有る、用具や法具のことを示している。

有時露柱灯籠の露柱とは、眼前の寺院の屋根を支える丸い立柱のことである。灯籠とは寺の欄干に吊られた灯籠である。有時張三李四の張三李四とは、中国では当たり前の苗字のことであり、張家の三男李家の四男のことであり、日本では佐藤家の三男田中家の四男だ。

有時大地虚空の大地は、地上のこと、虚空は天空、空間のことである。前二句と、後六句の八句は、主観の自己と客観の環境世界の一切を、道元、薬山の両古仏は、蓋時であることを明らかにする。